魔法少女リリカルなのは転生物語

空色

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のせいで魔法少女リリカルなのはの世界に転生することになってしまった……。

（原作を全く知らない状態で。）そんなひとりの少女の物語。

原作なんて知らないんだよ、だから原作に介入してしまってるとかそういう意識もないんだよ。

目次

プロローグ ―――― 1
慣れない世界へ
ここはどこ?私は空名。 ―――― 2
出会い、はじめて ―――― 5

プロローグ

――転生します。神様が間違えて私を殺してしまったようで。

リリカルなのは　の世界とは言われたものの、原作全く知らないんです。だから原作介入するかしないかとか、そういうレベルの話ではない……。

いい忘れていました。私、森本（もりもと）　空名（そらな）　っていいます。

原作全く知らないと言っても、神様からとりあえず魔導師や騎士、リンカーコアくらいの用語の知識は教えてもらいました。

ですけどそれ以外は全然……。

今から転生するようですけど、神様恨んでいいですか？

ただ、神様にそんなこと言えないので。

私のリリカルなのはの世界での生活は、幕を開ける。

慣れない世界へ
ここはどこ?私は空名。

とにかく、私は転生した。

原作の流れは存じません。けれど魔法の用語は習いました。

それって、魔法に関係を持たざるを得ませんよね。

習ったはいいけれど、私に魔法が使える――リンカーコアが存在するのかすらわからないっていう、ね……。

そして、ここはどこ?　私は空名。森本空名。――それは確実にそう。

「本気で、ここどこ!?」

標識が見える。道路も見慣れた、コンクリートのもので、『リリカルなのは』の世界は元々私が居た日本と変わらないのかな？　とすら思ってしまう。

ただしっかし、二次創作みたいに転生するならさ、原作知っててての上の話じゃないの？　これじゃあただの精神年齢の少し高い普通の女の子だよ。わざわざ転生って？

そういえば私は神様に殺されたんだっけか。それじゃーこんなよくわからない転生になっても仕方ないよ。

「海鳴ー？　ホントに日本、Ｊａｐａｎ　みたいな地名なんだ。この世界に魔法が有るなんて信じられないよ……」

って私のバカ!!　なんてことぼさいてんの。黄色い救急車よばれちゃうって。

「あーでも、実際には黄色い救急車なんてないんだったかな」

にしても魔法か。もし、私にリンカーコアがあったとしたら。
どうやって魔法と関わろう?　今まで生きてた日本には魔法なんてなかったから、半分バカみたいとか思っても少し興味がある。

「さて、ここ海鳴はどこにあるのかな」

「――あの……。魔法、知ってるんですか?」

「へっ!?」

「ここは地球の海鳴市です」

「あ……あ、そうなんだ?　ありがと」

私より2つくらい下かなっていう、二つ結びの、可愛らしい女の子がそこにはいた。

出会い、はじめて

それも、ただの二つ結びではない。金髪だった。外国人みたいだった。
長い金髪をツインテールにしたかわいらしい女の子。

彼女はここを地球と呼んだ。

つまりここは……、〝日本っぽい外国〟なのだろう。多分。

あれ、そういえばこの子魔法がどうとかって言ってたよね？
ウソ、それ大問題だよ!?　私妄想激しく思われちゃうよ!?

「わたし魔法しってますから、『変だ』なんて思わないので安心してください」

その少女はそう言った。

「あ、あははぁ……、そうなんだ？　うん、それはありがと。それから地名も教えてくれてありがとね。それじゃ」

本当は、この子が知ってる〝魔法〟が私のそれと一致しているのか知りたかったけど、もしも違ったらを考えると切り出せなかった。

なんでこんな思いしなきゃいけないのか。神様を恨みます。

「あ、待って……！」

「フェイトちゃんー！」

あ、あの子フェイトっていうんんだ。とか、少し場違いな感想を抱く。

「な、なのはー！」

あの子のこと、『フェイトちゃん』って呼んだ女の子はなのはというらしい。

「よかった、まだここにいて」

なのは　と呼ばれていたこちらもツインテール、ただし外見は日本っぽい女の子はなぜかそんなことを言った。

「まだここにいて、ってそれってどういう……」

「伺いたいお話があるんです。『いきなり知らない人にそんなこと言われても』って思われちゃうとは思うんですが」

「わ、私に？」

「はい」

これもしかして原作介入コースなのかな？じゃないとさ、いきなりよくわからない人間に聞く話なんてない、よね？

「あ、あの……。立ち話もあれですから一端――」

そういうことがあって現在私がいるのはフェイトさん（自己紹介は既にし終わり、そう呼ぶことにした）の家。

家についてからも、また人がいてまた自己紹介。

次はフェイトさんのお兄さんのクロノさんにお母さんのリンディさんだそうだ。

どうやら私が海鳴に転送（ホントは転生）されたときに魔力反応があがったみたいでそれの調査だったようだ。

私はそれから向こうから〝魔法〟について説明され、自分の知識と一致してホッとしていた。

「それで」

リンディさんがそう切り出した。

「あなたには魔導師の適正はありそうだから、それがどういったものか検査してみましょう」

と。